

獄 中 記

<福山辰夫>

第二回

皇紀 2652 年【平成 4 年・西暦 1992 年】

6月5日(金)

安静にしているものの微熱が続く為、レントゲン検査と採血・採尿検査を行う。

当初は風邪で入病との事だったが、どうやら『結核性胸膜炎』が再発したようである。

だいたい、治癒をしたという事で「東京拘置所」の担当医師からお墨付きを貰って、宮城刑務所に移管された筈であるのにも拘わらず、又揃左肺下胸膜に水が溜まっているとの診察結果だが…。今のところは取り敢えず、経過を見ながら投薬治療だけで左肺下に溜まった水を散らすという療法を取るらしいが、医師の「休養解除許可」が下りる迄の間は、再びの病棟暮らしになりそうだ。尚、朝昼晩の食事が「結核菜」となり、5等飯(めし)ながらも栄養をつけないといけないとの事由から、毎食卵料理(目玉焼き・玉子焼き・玉子とじ等をローテーションで給与される)のおかず1品が増える。

また風邪休養ではないという事で、工場から回送されて来て病舎担当の預かりとなっていた「筆記具・ノート・私本・差し入れのスポーツ紙『日刊スポーツ新聞』が舎房に入る。従って、この『獄中記』も再開である。5月分の賞与金教示有り。「写植文選工・見習い工」=561円也。

6月7日(日)

夕方のラジオ放送で、関東地方が梅雨入りしたという。東北南部の梅雨入りはいま少し先のようなのだが、相変わらず微熱が続き体調が優れず。

6月20日(土)

午前10時～11時半迄、本所地区の講堂に於いて、慰問演芸『安倍里葎子ショー』が催される。工場で就業していれば、当然如く同囚らと一緒に観る事が出来たのに、病棟で静養中の身

には観劇も叶わず。舎扉の上部壁に埋め込まれているラジオのスピーカーから流れる安倍里
葎子御一行の歌声を、1人寂しく独居房で聴く。ラストの曲は、デュエットの女王と言われる
彼女の代表曲「今夜は離さない」（橋幸夫／安倍里葎子）をソロナンバーで歌って終演。

午後からの余暇時間は、妻宛に近況報告の便りを認める（便箋7枚）。

夕方に体温を測るも、微熱が引かず。

6月23日（火）

病舎地区の定期発信日にて、妻に便りを出す。四級者の小生は発信度数が月1回。

但し、緊急を要する場合などは担当看守に願い出て『特別発信願』の願箋を出せば便りを出
す事も可能である。宮城刑務所の特別発信は意外と安い。

6月26日（金）

病舎地区の私本定期配布日。入所時に持参して会計領置をしていた『新明解国語辞典／三省
堂』、『漢和辞典／旺文社』、『会津の小鉄 上・下』の四冊が手元に届く。これらの本は、拘置
所時に木元の姐さんに差し入れて貰ったものであり、有難く読ませて頂きます。

7月7日（火）

6月分の賞与金教示有り。病棟で休養して「刑務作業」を行っていない為、当然のことなが
ら0円。今日は七夕なれども、相変わらず夕方になると熱が上がる。

7月19日（月）

関東地方が梅雨明け宣言。みちのく仙台は、未だに梅雨真ただ中である。

朝昼晩と食後には「お菓子」の如く薬を服用しているが、左肺下胸部の水が散っていないの
か、微熱が続いている。雨と共に、毎日が鬱陶しい。

7月20日（火）

午前中に面会があり、両親と妻の3名が来る。折角、川越から父親の運転する車で来てくれ
たのに、再びの休養生活になったことで、逆に心配をさせてしまったようだ。

面会時間は、規定により30分。殆ど小生が一方向的に喋って終了。

7月28日(火)

東北地方南部は、漸く 24 日に梅雨明け宣言が出て本格的な夏の到来である。定期発信日に付き、先週の面会のお礼と病状説明及び近況報告の為、妻宛に便り（便箋 7 枚）を出す。

7月31日(金)

私本の定期配布日につき、領置していた『故事ことわざの辞典／小学館』、『四字熟語辞典／日本文芸社』と、領置金（所持金）にて購入した雑誌 1 冊の計 3 冊が手元に届く。

8月7日(金)

昨日から『仙台七夕まつり』が始まったとの由。尚、7 月分の賞与金教示が有るも、休養生活で全く「刑務作業」を行っていないので 0 円。

あれだけ続いていた微熱も下がり、ここの所体調は良好。いい加減この休養生活から抜け出さないと工場の同囚らにも忘れ去られてしまうのではないだろうか…。

8月11日(火)

昨日は「定期診察日」であり、内科担当医師の診察を受ける。ここの所、熱も上がらず咳込むこともなく、過日に行ったレントゲン検査の結果も溜まっていた左下胸部の水も散ったとの事で、5 月 25 日以来の「休養解除許可」が下りる。

病舎地区の定期発信日につき、妻宛に便り（便箋 7 枚）を出す。

朝餉を済まして、私物を纏めると 9 時過ぎに若い看守が迎えに来たので、お世話になった病舎 1 階の担当看守に挨拶をして管理棟（保安課）へ向かう。配役の時と同じように本所地区の第二係長である斎藤係長より、再び 13 工場に出役するようにと告知を受ける。

約 3 ヶ月近くの休養生活だった訳だが、宮城は長期刑務所故に余り工場的人员に変更はないと思っていたものの、戻ってみると当所に於いては数人しかいない 1 級者でもあり、同じワープロ班の 1 番後ろで校正機に乗っていた A 氏と 2 舎 2 階 6 室で同房だった S 氏の 2 名が『仮釈放』間近となり、転業した旨を知る。

先ずは体均しの為に、暫くは「外掃班」で力仕事をさせられるのだが、仮釈 2 週間前になると「黎明寮」（れいめいりょう）に移り、出所するにあたっての教育を 1 週間受けることになる。

それをクリアすれば、最後の1週間は「希望寮」(きぼうりょう)という平屋の一戸建てに移って、布団・枕・衣類等が娑婆仕様になり、釈放当日まで心静かに生活を送り釈放日を迎えるのだ。因みにA氏は、懲役20年で釈放される迄の19年を宮城で務めたので、実質1年弱しか仮釈を貰えていない。このA氏だが元連合赤軍の幹部であり、昭和46年(1971年)から昭和47年(1972年)かけて「連合赤軍」が総括という名の下に起こした『山岳ベース事件』(リンチ殺人事件)の関与者である。

小生とは、僅かな間しか一緒に生活はしなかったものの、既に思想転向をしていて「もうとっくに左の時代は終わっている。これからは右の時代」と言っていた。作業に戻ると住吉系のA親分をはじめ、同囚らにも暖かい声を掛けて頂く。本当に有り難いこと。

8月13日(木)

本日より「盆休み」に入り、16日迄4日間の「免業日」となる。

午後1時~3時迄、テレビVTR視聴有り。教育課の職員による録画放送で、『平清盛(上)』(TBSが製作した、新春ドラマの録画もの。出演:松平健、名取裕子、かたせ梨乃、高橋英樹、丹波哲郎、十朱幸代、松方弘樹、岩下志麻、中村嘉葎雄、草笛光子、夏八木勲ほか)を舎房内で観る。

※武家の台頭で、今迄の公家社会から武家政権へと移り変わる動乱期を主人公である平清盛(松平健)とその周辺の間人模様を通して描く大作。

8月14日(金)

「免業2日目」。午後1時~3時迄、テレビVTR視聴有り。

昨日の続きで『平清盛(下)』を観る。日本で初めて「武家政権」を開いたのが清盛であるものの、本当に確立するのは、もう少し時が下って「平氏」を滅ぼした「源氏」の頭領となる源頼朝が朝廷より「征夷大將軍」を任じられて鎌倉の地を本拠として幕府を開いてからだ。

いつの世もそうであるが、平安時代も末期になると公家たちは朝廷内での主導権争いに血道をあげるようになり、本来は莊園を守るのが主である武士達も巻き込まれてしまう。

各地では戦(いくさ)が勃発し、やがて朝廷のお膝元である京の都は「飢饉」と「疫病」が流行り、正に地獄絵図さながらな状況となる。「驕る平家は久しからず」という諺で語られる清盛であるが、「太政大臣」になって権勢をふるうまでは、民に寄り添う政治家であったとい

える。時代を変える時には、必ずこの様な梟雄が世に出でるものであることは古今東西の歴史が証明している。単なる TV ドラマであるけど、そういった視点でもって視聴すると、また別な物語の情景というものが見えてくる。

8月15日(土)

「免業3日目」。

午後1時～3時30迄、テレビVTR視聴有り。今日は『生命燃ゆ(いのちもゆ)～娘よ、我が人生に悔いなし』(テレビ朝日製作。出演：渡哲也、十朱幸代、前田吟、神田正輝、野川由美子、中村嘉葎雄、寺尾聰ほか)を観る。原作は、企業小説の第一人者である高杉良。

「直腸がん」で長期療養を余儀なくされた渡哲也の「本格復帰記念ドラマスペシャル」でとして、先日放送されたものの録画放送。昭和電工の大分石油コンビナートエチレンプラント建設に尽力し、若くして病に倒れこの世を去ったエンジニアの実話物語。

8月24日(月)

川越から両親が面会の為、来仙。小生の近況を伝えるのみで30分の面会が終わる。

便りにて依頼をした本3冊を面会受付で差入れをして頂く。

8月26日(水)

妻から便り有り。毎日毎日、ただ只管工場と舎房の間を行き来するだけの「懲役」と違って、娑婆の方は色々と大変なようだ。やっと刑期の緒に就いたばかりの身には、今は出所することなどは一切考えてられないのが実情。

8月28日(金)

終業して舎房に戻ると、工場区の定期私本配布日に付き『小説東急王国』(大下英治/毎日新聞社)、『現代哲学辞典』(山崎正一+市川浩編/講談社現代新書)、『論語～現代に生きる中国の知恵』(貝塚茂樹著/講談社現代新書)の領置下付本4冊と領置金購入の雑誌1冊の計5冊が交付される。

9月5日(土)

免業日の今日は、午前10時から11時迄、『陸上自衛隊東北方面音楽隊』の慰問が有り。

指揮者は、陸上自衛隊の階級では「1等陸佐」というから、戦前の帝国陸軍でいうところの「大佐」と同等になる。陸自の音楽隊と雖も観閲式や諸外国の要人来日の際には演奏をする機会もあるようで、隊員全員が任務を終えてからとなるが、日々の練習は怠らないという。

自衛隊を否定する、何処かの頭でっかちな政党に教えてやりたい。

9月8日(火)

8月分の作業賞与金教示有り。見習い工から1つ上がって「写植文選工・9等工」=545円也。先月は病棟帰りで、実質的な作業時間は半月程度なので致し方がない。

しかし、これは時給ではなく1ヶ月働いたうえでの給与額がこの額である。「懲役」とはいえ、いい大人が情けない…。

9月10日(木)

工場定期発信日に付き、妻宛に便りを出す。文面は、小生の近況報告を綴る(便箋7枚)。

9月13日(日)

免業日。

改めて、この様な圀圍の暮らしを送っていないと解らなかったが、『明治大帝』の御崩御により、大正元年(1912年)のこの日に「乃木希典大将夫妻」が殉死をした日と知る。合掌

9月15日(火) 敬老の日

祝日にて免業。「敬老の日」とは、戦前の祭日にはなかったが、戦後の『国民の祝日に関する法律』(祝日法)によって制定されたものである。その名の由来には諸説あるだろうが、一説によると光明皇后(聖武天皇の皇后)が593年の9月15日に四天王寺に「悲田院」を設立した日に因んだとか、元正天皇が717年を「養老」とし、高齢者に贈り物をした日が9月15日だったという説もある。何れの説が正しいのか分からないが、戦前は皇室の行事と祭祀に関わる日を「祭日」とし、戦後は上記の如く「祝日法」によって新たに制定されたのが祝日と私たちは思いがちだが、決してそのような事はないのである。

9月21日(月)

作業中に、面会の呼び出しが有り両親と妻が来仙。妻の顔を見るのは久方振りにて、話したかった事も碌に言えずに面会時間30分が終了。

尚、事前に便りにて依頼をしておいた本3冊を差入れして貰う。

9月26日(土) 運動会

免業日であるが、朝から『宮城刑務所～分区対抗運動会』が挙行される。

小生が宮刑に入所して初めての運動会となるが、まだ病み上がりの為、今回は競技には一切参加せずに応援側に回らせて頂く。

運動会といっても「分区対抗」とうたっているのは、1から15まである一般の生産工場と舎内・内掃・外掃・営繕・炊場・被服(洗濯)・計算図書・衛生扶・看護班といった非生産工場が、1～10分区に分かれて各競技の順位による得点(1位=3点・2位=2点・3位=1点・以下=0点)を競い合うのだが、13工場は同じ印刷工場の10工場と「第8分区」で共闘。そして、最終的に総合得点の高い「分区」が優勝となり、所長直々に「優勝旗」を授与され、次の年の運動会迄「優勝旗」を工場の食堂に飾る事が出来るという特典が付く。

だいたい、懲役が塀の中で運動会なんて「いい大人が何考えているんだ…」と思っていたものの、皆が童心に返って必死になって競技を行い、それを見て他の者が応援をする。

そして、抑圧された日々のストレスを発散するかのように全員が楽しんでいるのである。

普段なら大声を出したら直ぐに怒られてしまうのだが、この時ばかりは大声を出して同囚を応援する分には看守に注意を受けることはないからだ。競技の途中に、コカ・コーラ(500ml/ペットボトル)と明治の板チョコ、バナナ1本の給与有り。

尚、全ての競技と応援合戦を終えて、昼餉は工場区の全受刑者と共にグラウンドで「焼肉弁当(豚肉)」を食す。久々の麦が入っていない「銀シャリ」(*白米のみ米飯)は、真っ白で眩しい(笑)。昼餉を終えると、結果発表に続いて表彰。残念ながら「第8分区」は散々たる成績で惨敗。但し、応援の部で団長をやった懲役13年と無期刑の2刑で刑期を務めるN氏が「月光仮面」の仮装で盛り上げ、全体的に纏まりがあったとの評価を貰い、13工場が『応援部門』で「優秀賞」を受ける。還房後は、舎房にて副食の「袋菓子」詰め合わせが給与される。

10月8日(木)

9月分の賞与金の教示有り。

「9等工+1割増」=927円。工場定期発信日に付き、妻宛に便り(便箋7枚)を出す。

10月19日(月)

両親が面会の為に来仙。

娚婆の方は、特に地元川越は変わった事はないらしいが「バブル崩壊後」は、今ひとつ景気が良くないとの事である。便りにて依頼をした本3冊とスポーツ新聞(『日刊スポーツ』3か月分)を差入れして帰る。感謝

10月20日(火)

皇后陛下の御誕生日。全然関係のない話ではあるが、小生の親分である高島義雄親父が銀座の『割烹 はん弥』のママと一緒に住んでいる所が「東京都品川区東五反田」である。

そして、直ぐ近くにあったのが皇后さまの御実家であられる『正田家』なのだ。運転手兼秘書だったので良く親父を送迎する際に、屋敷の前をベントレーで通った事を思い出す。

「お前は一日も早く帰って来て、俺に尽くすのが仕事なのだからな、分かっているな…」。

『東京拘置所』で赤落ちする前に面会に来た親父が言った言葉を胸に、明日からも頑張ります。親父、くれぐれも健康には御留意下さい。